

【特別寄稿】

扇

柏倉康夫

ステファヌ・マラルメの詩集に、「扇」と題した詩が二篇おさめられている。新たに訳し直した拙訳を引用すれば、

扇

マラルメ夫人の

言葉のためであるかのように
空に向って一度羽ばたくだけで
未来の詩句は解き放たれる
いとも貴いその住処から

翼はごくひそかな運び手
この扇がもしそれなら
同じものを君のうしろで
鏡か何かきらめかせた

澄んだ面（そこに粒のようになった
目に見えぬわずかな灰が
また降り積もるだろう
ただそれが私を悲しませる）

いつも扇はこうして出現する
たゆみない君の手のうちに



そしてもう一篇――

もうひとつの扇

マラルメ嬢の

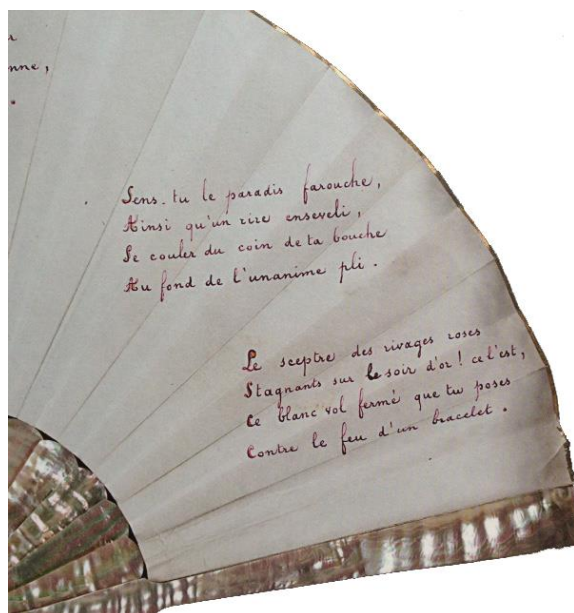
おお、夢みる娘よ、行方知れぬ
純粋な歓びに私を浸らせようと、
巧みな嘘で私の翼を、
お前の手に握っているがいい。

夕暮の涼しさが
ひと扇ぎごとにお前を訪れ
その囚われの羽ばたきが
そっと地平を遠ざける。

眩暈がする！ 空間がふるえる
まるで大いなる口づけのように
そう、人を求めて狂おしく生まれようとして
迸ることも鎮まることもできない。

感じるかな、怯えた樂園が
秘められた笑いのように
君の口の端から
折り畳まれた襷の奥へ流れていくのを！

そうそれは、黄金の夕べにまどろむ
バラ色の岸辺の王笏だ、
君が腕輪の火に添える
閉ざされたこの白い飛翔は。



マラルメが「折りふしの詩句」**Vers de circonstance** と呼ばれる詩句を、意識してつくるようになったのは 1880 年代半ば以降のことである。多くは短詩で、扇の面や蘆笛のまわりに巻かれた小旗、記念の写真、復活祭の卵の贈り物の上に書かれて、親しい人たちに進呈された。なかでも手紙の相手の名前や所番地を詠み込み、角封筒の上に書かれた四行詩は実際に投函され配達された。上の二つの詩篇も実際に扇の上に書かれて、マリー夫人と愛嬢ジュヌヴィエーヴに贈られたものである。いまはセーヌ・エ・マルヌ県のヴェレーヌ＝シュル＝セーヌにある「県立マラルメ記念館」に所蔵、展示されている。

同記念館は 2009 年 9 月 19 日から 12 月 21 日まで、『空に向かって一度羽ばたくだけで・・・

ステファヌ・マラルメの世界における扇』と題した展覧会を催した。そこには文学だけでなく、絵画、音楽に出現した「扇」をテーマとした作品が集められた。

扇の起源は古代オリエントで、権力を示すものあるいは祭祀のための道具として用いられた。今日見つかっているもっとも古い扇は、エジプトのツタンカーメン（紀元前 1342 年頃—1324 年頃）の墓から出土したものである。

従来、扇には二つのタイプがあった。一つは団扇状のもの、もう一つは折り畳み可能な扇である。この折り畳み式の扇が最初につくられたのは日本で、中国でもそれが模倣された。ヨーロッパではギリシア・ローマ時代、すでに女性が手にするアクセサリーになっていたが、中世のヨーロッパでは依然として王権を象徴するものであり、扇が一般に普及するにはルネサンス期を待たなければならなかった。このころ日本と交易をはじめたポルトガル人がヨーロッパに持ち込み、広めたのがきっかけであった。

さらにイタリア・フィレンツェのメディチ家に生まれた二人の女性、カトリーヌ・ド・メディシス（アンリ二世の王妃）とマリー・ド・メディシス（アンリ四世の王妃）が扇をフランス宮廷に持ち込み、やがてヨーロッパの貴族の女性のあいだで流行となった。17 世紀になると、真珠、象牙、鼈甲といった貴重な素材でつくられた扇が出現し、また美しい絵を描いた豪華な扇も出現した。そして 18 世紀、扇は黄金期を迎え、19 世紀になると扇は大量生産されて多くの女性の手に渡るようになった。詩人のテオフィル・ゴーティエは 1834 年にスペインを旅行した折りの見聞を、「私はこの幸福な国で、扇を手にしなない女性を一人として見たことがない」と書いている。ナポレオン三世がスペイン貴族のウージェニー・ド・モンティージョと結婚したことから、スペインの女性文化がフランスに及び、スペイン風の扇が流行することになった。

その後、1860 年代以降にはジャポニズムが流行し、扇や団扇を手にする浮世絵美人を真似た女性の姿が、フランス絵画のなかで数多く描かれることになった。エドゥアール・マネの《扇と女、ニナ・ド・カリアス》（1873 年、オルセー美術館蔵）や、クロード・モネの《ジャポネーズ（日本娘）》（1876 年、ボストン美術館蔵）がその代表である。マネ、ドガ、ベルト・モリゾ、カミーユ・ピサロたち印象派の画家たちは、扇面に直接絵を描くこともした。彼らと同世代だったマラルメは絵を描く代わりに、扇面に詩を書いて妻や愛嬢をはじめ親しい女性への贈り物としたのである。

現在「マラルメ記念館」となっている建物はパリの南東 60 キロにあり、マラルメは 1874 年 8 月、フォンテーヌブローに近いセーヌ河畔の小さな村ヴァルヴァンに初めて避暑に行き、この辺鄙な田舎を気に入った。やがて一軒の農家を買って別荘として夏休みなどの休暇を過ごし、やがては終の棲家となった。彼がここで息を引き取ったのは 1899 年 9 月 9 日のことであった。

そして第二次世界大戦の末期、この石造りの家は敗走するドイツ軍を追うアメリカ軍のパットン戦車隊の砲撃で崩れ落ちてしまった。その直後の家の内部の写真が残っているが、マラルメが「日本の間」と呼んでいた仕事部屋の壁に、編み笠姿の日本娘を描いた団扇が張られていた様子が映っている。その後家は元通りに再建されて今日に至っているが、団扇の行方はわからなくなってしまった。

